日本列島 病院探訪

全国の特徴ある病院を取材する〝フォルテ〟

理事長・院長
大髙　祐一
Yuichi Otaka

"FORTE"

医療法人社団 忠医会

大高病院

Otaka Hospital

救命救急センターとクリニックの医療の狭間を埋める東京初の救急科専門病院

聞き手／ドクターズマガジン編集部　文／安藤梢　撮影／小菅聡一郎

広告

日本列島 病院探訪

つくばエクスプレスや日暮里・舎人ライナーの開通で、ベッドタウンとして栄える東京都足立区。近年では複数の大学の誘致が進み、活力ある街づくりが進められている。今回取材した大高病院が、東京で初めての救急科専門医院として開設されたのは2013年。当初は大高医院として5床の有床診療所からスタートし、同年12月には病院へ改組。現在では地域の医療ニーズに応えながら、82床まで病床を拡大している。

大高院長は、東京医科大学病院の救命救急センターで医局長を務めた経験から、「これまで何度も医療体制の隙間にこぼれ落ちていく患者を見てきた」と話す。精神疾患をもつ患者の身体疾患が受け入れられない、重傷者が優先され後回しになる患者が出てしまうなど、救急医療の課題を目の当たりにするうちに、その受け皿となる医療施設が必要だと思うようになったという。足立区は救急車搬送台数や精神科病院、高齢者施設が多く、「ここでなら地域の救急医療に貢献できる」と考えた。

インタビュー中、大高院長が繰り返し口にしたのが「役に立つ」という言葉。「地域の役に立ちたい」「患者の役に立ちたい」――。そんな大高院長の強い思いから、同院の歩みは始まっている。開設にあたって掲げられた3つのコンセプトを通して、その歩みを追いかけていきたい。

足立の花火

大高病院が位置する足立区は豊かな自然と都会の利便性が融合した地域。荒川河川敷で開催される、夏の風物詩「足立の花火」（写真左）や毎年多くの参拝客が訪れる西新井大師（写真右）は有名

"FORTE" 医療法人社団 忠医会 大高病院 Otaka Hospital

"FORTE" 1 「すぐ診てほしい」に応える軽症者の受診を断らない救急

大高院長が病院の指針としている3つのコンセプトがある。その1つが、「自力で来院できる患者にアージェント・ケア（Urgent Care）を行うこと」。同院では、北米で取り組まれているアージェント・ケアを国内でいち早く導入している。アージェント・ケアとは、救急医療とプライマリ・ケアの中間的な位置付けで、救命救急センターに搬送するほどの重症例ではないが、急な症状で医療機関を受診したいという患者のニーズに応えるもの。

「大きな病院ではそうした軽症の患者さんは断られてしまいますが、クリニックでは対応できる医師がいない。これまでは受診の選択肢がありませんでした。でも、急な発熱や怪我など、軽症だと分かっていても、とにかく早く診察をしてほしいというニーズはあります」

曜日や時間帯にかかわらず、ウオークインで受診できる救急病院があれば役に立てるのではないかと考えたことが、病院開設を決めた理由でもある。開設以来、多くのウオークインの患者を受け入れ、小児の転倒、熱傷といったクリニックでは診療が難しい症例や、急な皮膚の発疹、蕁麻疹など皮膚疾患の領域で特にニーズがあることが分かった。また、新型コロナウイルス感染症の流行下において、アージェント・ケアが力を発揮した例もある。

「発熱が続いていた高齢の患者さんを診察したところ、肝膿瘍が見つかりました。他の病院やかかりつけのクリニックでは、コロナ感染の疑いがあるために受診拒否されてしまったそうです」

アージェント・ケアが求められる一方で、気軽に救急を利用するコンビニ受診が問題視されている現状もある。しかし、大高院長は「アージェント・ケア＝コンビニ受診」とは考えていない。

「結果的に『来なくても良かった』となるかもしれませんが、患者さんが診てほしい時に診るのが私たちの役目ではないでしょうか。たとえ軽症であっても患者さんが希望するのであれば、それに応えていきたい」

"FORTE" 2 精神疾患、終末期の高齢患者など受け入れ困難例も対応可能

同院の2つめのコンセプトは、「救急車での受け入れ先が見つかりにくい患者を受け入れること」。例えば、症例の多い交通事故による開放骨折では、まず同院で救急の初療にあたり、頭部や腹部の検査をしたうえで整形外科の手術ができる病院へとつなぐ。この適切な検査と処置により、あらかじめ必要な治療が分かるので、引継ぎ先の病院が受け入れやすいのだという。

他にも搬送が困難な例として、在宅医療を受けている高齢者の急な発熱、呼吸不全なども挙げられる。そうした患者が救命救急センターに搬送されると、望まない救命処置をされてしまうことがあるからだ。

「積極的な治療を希望しない終末期の患者さんに対しては、当院で救急の初療を引き受け、そのまま入院していただくことも可能です。場合によっては看取りまで対応することもあります」

さらに、大高病院では精神科の既往歴や認知症のある患者の急性疾患も多く受け入れている。

「うつ病で動けなくなってしまった50代の方が搬送されてきたのですが、その方は精神科病院では初診なので受け入れてもらえず、急性期病院では精神疾患は診られないと言われて、行くところがなかったそうです」

最近では「救急医療の東京ルール」が制定されたため、必ずどこかの病院で患者を受け入れるようになったが、それでも搬送先の病院がなかなか見つからない状況に変わりはない。

こういった患者も受け入れることができるのは、精神科と救急科で学んだ大高院長の経歴が関係している。

「精神科で勤務している時に、救急対応ができる病院を探すのにとても苦労しました」と当時を振り返る。精神疾患は専門性が高く、救急医が対応するのが難しい一方、精神科医にとっても急性期の身体疾患は専門外の領域だ。当時は、現在のように研修で各診療科をローテーションすることもなかった。

「精神科の患者さんが、頭を壁に打ち付けて急性硬膜下血腫になってしまったことがあって。その時に十分な初期対応ができず、くやしい思いをしたことから救急医療を学ぼうと決めました」

脳炎の後遺症があるうつ病患者が、けいれん重積を引き起こした時にも、やはり精神科医が身体疾患に対応できる必要性を感じたという。そこで大高院長は、急性期における身体疾患の初期対応だけでも身に付けたいと、救急科に転科。精神科と救急科、2つの専門医資格を取得し、現在はそれぞれの専門性を活かした診療を行っている。

同院では精神科疾患のみの診療には対応していないが、他の病院では受け入れが難しい精神疾患・身体合併症の患者を積極的に受け入れている。精神疾患の患者がいざという時に医療機関を受診できない状況をなくす。それが、大高氏の目指す医療なのである。

院長先生に聞きました

大高病院を漢字一文字で表すと

応

どのような状況でも、どのような患者さんでも、診てほしいというニーズにいつでも応えられることをモットーとしている

アージェント・ケア（Urgent Care）

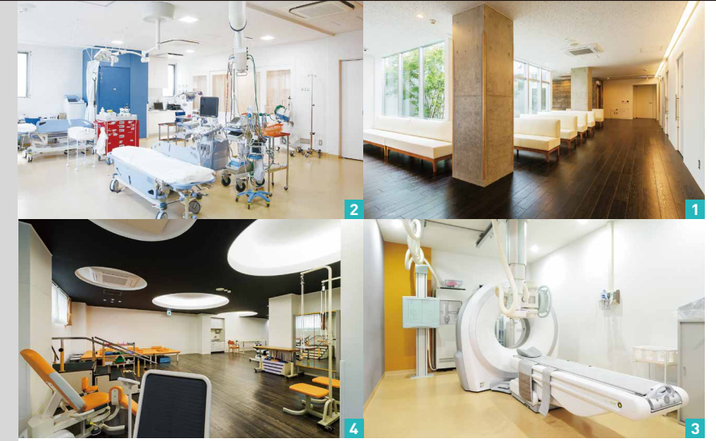
救命救急センターに搬送するほどの重症例ではないが、急な症状で医療機関を受診したいという患者のニーズに応えるもの。

- 切り傷、擦り傷
- 転んだ、頭をぶつけた
- 虫刺され、動物に咬まれた
- 小さなやけど、日焼け
- 急な皮膚の発疹、じんましん
- 目・耳・鼻の異物感、アレルギー
- インフルエンザ、咳、のどの痛み
- 急な発熱、頭痛、吐き気、下痢
- 気管支喘息発作
- 尿路結石、胆石の痛みが再発した
- どこに受診したらいいか分からない
- かかりつけの医療機関が休診

広告

"FORTE" 3

地域の救急体制を支える 患者と共に歩む医療を



1.待合室　2.救急初療室　3.CT　4.リハビリ室

そして3つめのコンセプトが、「救急医療の円滑化に寄与すること」。例えば、救命救急センターの後方支援を行うこともその一つである。入院できる日数が限られている救命救急センターでは、患者の状態が落ち着いたところで、その後の治療を引き受けてくれる病院を探さなければならない。大高院長は救命救急センターに勤務していた経験上、転院先の病院を探す難しさを知っている。

「救命救急センターからすると『落ち着いた』ように見える患者でも、一般病院では『まだケアが必要』だと判断されることが多々あります。当院ではそうした医療を必要とする患者さんを受け入れ、地域の救急体制を支えています」

同じ医療圏には東京女子医科大学東医療センター、隣接する医療圏に帝京大学医学部附属病院や獨協医科大学埼玉医療センターと、救命救急センターを有する大学病院が多数ある環境。高度急性期医療を担う救命救急センターと、かかりつけ機能を担う病院やクリニックの間をつなぐ救急病院として、同院は他にはない重要な役割を果たしている。

入院期間の短い救命救急センターでは、患者や家族に対して十分な説明ができないこともあるため、同院では事実を受け止めきれないまま転院してくる患者と家族のケアにもあたっている。

「急なことで、すぐには状況を理解できない方が多くいらっしゃいます。私たちが改めて病状や今後の治療計画、活用できる医療制度について説明すると、『ようやく分かりました』と言っていただけることもあります。そうしたフォローも私たちの役目だと思っています」

救命救急センターから療養型の病院に転院すると、その間の医療の隔たりが大きく、不安を感じる患者や家族も少なくないという。同院は救急病院としてその間に入って両者をつなぐことで、切れ目のない医療を実現させているのである。

現在、大高病院の救急科では、内科、外科、小児科、皮膚科、脳神経外科など幅広い領域に対応し、入院患者に対して理学療法士などがベッドサイドで行うリハビリテーションも提供している。33床ある障害者病棟は、意識障害のある患者や人工呼吸器を装着する患者の長期療養に利用されている。さらに今後は、訪問診療にも力を入れていきたい考えだ。

「ご本人やご家族の希望で在宅医療を始めても、病態の急変で不安になることや、『やっぱり入院のほうがいい』と、途中で気持ちが変わることもあります。私たちのような入院施設のある病院が訪問診療に取り組むのは、そういう何かあったときの受け皿になれるからです」

今、必要とされている医療は何か、大高院長の目は常に地域に向けられている。

「『こういう医療をしてみたい』とこちら側の思いで行うのではなく、この地域で必要とされることをやっていきたい。そこに私たちの存在意義があるからです」

大高病院3つのコンセプト

- **自力で来院できる患者様に Urgent Careを行うこと**
- **救急車での搬送先が見つかりにくい患者様を受け入れること**
- **救急医療の円滑化に寄与すること**

HOSPITAL DATA

医療法人社団 忠医会

大高病院

〒121-0815 東京都足立区島根3-17-8

院長：大高 祐一
開設：2013年
病床数：82床
外来患者数：60.1人／日
入院患者数：75.8人／日

診療科目

救急科、内科、循環器内科、小児科、脳神経外科、皮膚科、形成外科、美容皮膚科、リハビリテーション科、精神科（リエゾンのみ）